

氏名 藤田雄飛
 学位(専攻分野) 博士(人間・環境学)
 学位記番号 人博第312号
 学位授与の日付 平成18年3月23日
 学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
 研究科・専攻 人間・環境学研究科人間・環境学専攻
 学位論文題目 人間形成とメルロ＝ポンティの思想
 ——身体への書き込みとポストモダン言説——

論文調査委員 (主査) 教授 岡田敬司 教授 鯨岡峻 教授 小山静子 助教授 多賀茂

論文内容の要旨

本論文は、メルロ＝ポンティの思想の検討を通して、現在の教育哲学の主潮流をなすポストモダン言説に反駁することを主眼とする。それは主体が学ぶと言うことが困難になりつつあるポストモダン状況を受けて議論を開始する現在の教育学諸理論に対して、わたしたちの生は彼らが指摘するよりもはるかに強固な基盤の上に構築されていくことを示す作業である。以下、論文の論述順序に従って概要を述べる。

全体は8章からなっている。第1章は「予備的考察」で、スローターダイクの「人間園の規則」の検討によって問題提起が始まる。彼によれば、現代社会では人間性(フマニタス)を内容とするエクリチュールの世代間伝達は完全に空文化している。それは一言で言って情報伝達過程の非人格化が起こったからである。ポストモダン状況の進行によって人間関係を介しない情報へのアクセスが容易になり、誰かに向かって書き、誰かの文として読むという営みが意味をなさなくなってきたのである。だが、本は古文書化して読み手を失ってしまったかもしれないが、身体という媒体によって伝達は相変わらず存続している。これが論証すべき仮説である。

第2章は「身体と多形性」で、メルロ＝ポンティのソルボンヌ講義での子どもの多形性の検討、およびその元となったレイヴィ＝ストロース、フロイト、ヤコブソンらの所論の検討から、人間が先天的とも言える相互交流可能性を「身体にあらかじめ刻み込まれて」生存を始めることが説かれる。フロイトの多形倒錯の概念は、人間の持つ超文化共同体的な結びつきの可能性を、その形態的多様性を示すものであるし、ヤコブソンの音韻論的多形性の概念も同様である。このように書き込みの基体としての身体が当初から文化的、人間関係的書き込みの受け皿になっていることが説かれる。

第3章は「結びつく身体」と題され、子どもにおける性が人間の結びつきの本源であることが、精神分析理論およびメルロ＝ポンティの所論によりつつ主張される。ここでは先の多形倒錯の解釈を超えて、性が他者へと結びつこうとする人間の志向性の身体を媒介とする根源的表現であることが説かれる。

第4章は「ミメシス」である。古来学習のメカニズムの主要なものとして注目されてきたミメシスはしかしながらその時々の身体的模倣にとどまり、その持続化を可能にする身体への書き込みの次元の把握が不十分であった。これを補う習慣化、それによる文化慣習の取り込みの次元の解明が重要であると説かれる。ミメシスは強制を伴わない子どもの自発的学習だから意味深いとするヴルフたちの解釈が、悪しきポストモダン流教育学の解釈として退けられる。肝心なことは堅固な書き込みの可能性なのである。

第5章は「スティル」論である。ここでは身体への書き込みが個々の子どもの気ままにではなく、かといって出来上がった文化規範への全面服従でもない「スティル」を通した秩序化として捉えられる。模倣は断片的身体形態としてではなく、人格的とも呼ぶべきしぐさの、つまり意味を懐胎したスティルとしてなされていくことが説かれる。

第6章は「言語獲得とエクリチュール」である。知性の形成を契機に始まるものとされてきた言語獲得について、むしろ身体表現活動としての身振りや表情からの連続性を重視して理解すべきことが説かれる。メルロ＝ポンティはエクリチュ

ールではなくパロールの問題として、その所作的側面を強調していくが、それこそ身体に書き込まれたエクリチュールの生きた姿だとするのである。

第7章は「スタイルとデッサン」である。ここでは子どもの身体への書き込みがいかなるメカニズムで進行するかを、子どもの多面投影法から遠近法への移行を具体的に追っていくことで確かめられる。多面投影法では「見えるもの」ではなく「知っているもの」が描かれる。まさしく子どもは自分の世界を生き、そして表現しているのであるが、徐々に社会的、文化的圧力に順応していく。この領域では子どもの自由と社会的文化的圧力が独特の未決定性を残したバランスを出現せしめるのである。

第8章は「むすび」であり、全体が総括され、さらに補論でポストモダン言説の隆盛が一種のフェティシズムであることが述べられる。

このように本論文は人間の身体の本源的社会的性の指摘に始まって、ミメーシス、スタイル、言語獲得、描画法と、子どもの身体への文化の書き込みの諸相を、主としてメルロ＝ポンティの思想の綿密な読み込みに依拠しつつ書かれたもので、これによるならば現在社会においてもなお、わたしたちの身体には社会的、文化的な知が刻み込まれており、また、刻み込まれつつあり、こうした身体としてわたしたちが、また子どもたちが生きているのである限り、知が主体を素通りしてしまうと言うポストモダン状況は、人間の根源的な層においてはいまだ到来していないと言えるのである。

論文審査の結果の要旨

本論文はメルロ＝ポンティの思想の綿密な検討を通して、現在の教育哲学の主潮流をなすポストモダン言説に反駁することを主たる目標としている。主体が教えられ、そして学ぶということが、例えば情報伝達過程の非人格化によって完全に空文化しているというのがポストモダン流教育学の認識である。つまり現在の情報社会、消費社会においては子供たちが私的に恣意的に情報をつまみ食いする状況が一般化しているというのである。

こうした教育の現状把握に異を唱えるのにメルロ＝ポンティの思想、特にその身体論が有力な武器になることは容易に予想されるが、本論文はまさしくこれを実行したのである。

メルロ＝ポンティの思想は一般に精神・身体一元論として理解されることが多いが、本論文はソルボンヌでの教育学講義及び児童心理学講義を詳細に読み込む中から、この精神・身体一元論を更に分析的に、いかにその一元性が形成され、発展していくかを、人間形成過程の問題として解明していく。

まず注目されるのがソルボンヌ講義で詳細に取り上げられた幼児の多形性の概念である。メルロ＝ポンティはフロイトの多形倒錯やヤコブソンの音韻論的多形性の分析を材料としながら、幼児の身体が各文化の固有性の枠を超えた一般的で多様性に富んだ人間関係構築あるいは身体の相互の結びつき構築の可能性を当初から持っており、この原基に各固有文化が自らの形を刻み込んでいくという。これが本論文の言う「身体への書き込み」である。

本研究の価値は、この「身体への書き込み」の諸相をメルロ＝ポンティのテキストにおける指摘を主材料としながら、多面的に追求したことにある。原初的書き込み、あるいは半ば生得的な書き込みは性であり、精神分析理論に依拠しながら、性とは人間関係構築の力であり、人間の結びつきの形であることが説かれる。ここに様々な「上書き」がなされていくのであるが、それが「ミメーシス」であり、「スタイル」であり、「言語獲得」であり、「描画法」である。

これらの様々な身体への書き込み、あるいは上書きは、ある部分はおそらく教育の問題として意識されたが、多くの部分は教育の下部構造として極めて重要であるにもかかわらず、教育問題として主題化されることがなかった。

この状況に一石を投じ、メルロ＝ポンティの所論の教育論としての価値を明るみに出したのが、本研究の視座である「ポストモダン言説による教育論への反駁」である。この狙いにおいて、メルロ＝ポンティの身体論は教育論としての輝きを増すのである。

ポストモダンの「コピーアンドペースト」状況は、実はそれに先行する主題化されないままの身体への様々な書き込みによってこそ可能になっている、というのが本研究のもっとも痛烈な主張である。ポストモダン状況が事実であろうと、語り手（教育学者）の過剰な語り過ぎなかりと、そしてそれが教育・学習であろうと、そうでなかりと、そうした営みを根源において支え、可能ならしめている書き込み、未主題化のままの身体への書き込みの機序を明らかにする必要がある。

本研究はこれを「人間形成」と呼び、広義の教育・学習の営みとして解明しようとしたのである。

本研究で取り上げられた性や言語や描画などは、あるいはしつけと称する周辺教育として、あるいは言語教育という典型的な知育として、あるいは描画を通じての情操教育、芸術教育として、既に多くが語られてきた。本研究が成し遂げたのは、この古来の教育論の否定や改作ではなく、その根拠付けとも言うべきものである。即ち、それらの多様な教育は申請者の言う「身体への文化の書き込み」という深層の機序に支えられており、メルロ＝ポンティのテキストの読み込みによって解明可能となったものである。

メルロ＝ポンティの身体論は精神・肉体一元論として捉えられるあまり、ややもすると身体は「はじめから」意味的存在であったとしてやり過ぎされる。本研究は、はじめから意味的存在であったとしても、多重の意味領域で文化的書き込みが、より正確には「上書き」が着々となされていることをメルロ＝ポンティの記述そのものの中に見出し、これをクローズアップすることで、メルロ＝ポンティの思想を教育論として読み解くことに成功した。書き込み過程の自身による観察研究は今後の課題である。

本申請者が所属する人間形成論講座の目的の一つは、社会環境における人間形成の機序の解明にあるが、本研究はこの目的にそった基礎的研究として高く評価でき、教育人間学関連分野への貢献がさらに期待される。

よって

本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成18年1月25日、論文内容とそれに関連した事項について諮問を行った結果、合格と認めた。